

聴覚障害児の格助詞の理解に関する一研究③

一文を読み上げる音声及びアニメーションを用いた格助詞学習教材の検討—

○坂口嘉菜

(筑波大学附属聴覚特別支援学校)

澤隆史

(東京学芸大学総合教育科学系)

KEY WORDS: 聴覚障害児, 格助詞, デジタルコンテンツ

I. 目的

本研究は坂口・澤(2016)の研究を発展させたものであり、聴覚障害児の格助詞の誤用の特徴を明らかにしながら、より効果的な格助詞の学習方法・教材について検討することを主な目的としている。第三報となる本研究においては、これまでの研究によって明らかになった誤答の傾向及び格助詞選択の際の理由をふまえ、①選択した格助詞を入れて文を読み上げる音声で格助詞の選択に影響を与えるかを検討し、さらに②格助詞の使用が困難である構文を中心に、イラストに語順が示され、利益を受けるものと動作主が視覚的に分かりやすいアニメーション教材を用いた学習によって格助詞選択の成績に伸長が見られるかどうかを明らかにすることを目的とした。

II. 方法

聴覚特別支援学校に在籍する14名の生徒(13~16歳)を対象に、課題文に合う格助詞を空欄に回答させる形式の事前テスト(42点満点)を行った。対象児14名の平均聴力レベル(4分法)の平均は裸耳で108.1±14.8dB(範囲50~120dB↓)であり、補聴閾値の平均は47.9±19.9dB(範囲0~105dB)であった。事前テストの点数の平均は38.4点であり、11名は正答率9割を超していた。正答率9割に満たなかった生徒3名を対象に同じ問題を、iPadを用いて音声を聞きながら解いてもらった。音声付き事前テストは助詞を選択する形式で実施した。選択肢の下には、その助詞を空欄に入れ込んだ場合の文を読み上げる音声ボタンがついている。なお、音声付き事前テストは読解力向上教材作成支援アプリケーション OMELET を使用して作成した。3名の生徒には、全ての音声ボタンを押して音声を聞き、参考にしながら助詞を選択するように指示した。なお、3名の生徒は聴覚活用を基本とする指導を受けており、教材の音声が聞こえることを確認している。その後、紙媒体での事前テストの結果と音声付き事前テストの結果を比較し、対象の生徒に対して教材に関するアンケート調査を行った。その後3名の生徒には、助詞の選択が難しいとされる受動態・使役態・授受表現・自他動詞の文を中心に、空欄補充式の問題及びアニメーションを取り入れた解説教材を使用して一定期間学習を行ってもらい、成績の伸長を検討した。教材はiBooks Authorを使用して作成し、iPadに教材を入れて生徒に渡した。研究の実施にあたっては、本人と保護者の承諾を得て、個人情報の取り扱いには十分に配慮した。

III. 結果

①文を読み上げる音声で格助詞の選択に与えた影響

紙媒体での事前テストの結果と音声付き事前テストの結果を比較したところ、生徒Aは31点から34点に上がった(誤答が正答に変化…7問、誤答が誤答のまま…4問、正答が誤答に変化…4問)。生徒Bは34点から39点に上がった(誤答が正答に変化…4問、誤答が誤答のまま…3問、正答が誤答に変化…0問)。生徒Cは28点から30点に上がった(誤答が正答に変化…4問、誤答が誤答のまま…9問、正答が誤答に変化…2問)。3名とも、紙媒体の事前テストでは「お母さんは、弟(の)お弁当を持たせた。」と回答したが、音声付き事前テストでは「お母さんは、弟(に)

お弁当を持たせた。」を選択した。「駅のそば()デパートがある。」においても、2名が(で)→(に)と正答することができた。3名とも音声を聞きながら問題を解いたほうが、点数が高くなることが分かった。一方、「お母さんは、お兄さん(に→の)本を読ませた。」「大きなイスはお父さん(が→に)使う。」など、正答だった問題で誤る場合もあった。音声付き事前テストについて、「声を聞きながら問題を解くと分かりやすいですか」と5件法で質問したところ、生徒Aと生徒Bは「とても分かりやすい」と答え、生徒Cは「少し分かりやすい」と答えた。生徒Aは「声を聞いているとおかしいなと気づける問題がいくつもあった」と述べ、生徒Bは「いつもしゃべって聞いているから、聞いた方が『あれ、変だな』と分かる」と述べ、生徒Cは「(最後まで)音を聞かなければいけないから、よく考えたと思う」と述べた。

②アニメーション教材を用いた学習の効果

学習前と学習後の点数を比較すると、受動態(13点満点)では生徒Aが1点→13点、生徒Bが8点→10点、生徒Cが2点→10点、使役態(10点満点)では生徒Aが3点→7点、生徒Bが6点→5点、生徒Cが6点→8点、授受表現(12点満点)では生徒Aが7点→9点、生徒Bが8点→9点、生徒Cが7点→9点、自他動詞(20点満点)では生徒Aが10点→18点、生徒Bが18点→18点、生徒Cが11点→17点と概ね成績に伸長がみられた。アニメーション教材についても5件法で評価してもらったところ、3名とも「とても分かりやすい」と答えた。

IV. 考察

聴覚活用を基本とする指導を受けてきた聴覚特別支援学校の生徒は、文を読み上げる音声を聞くことで格助詞の選択の正答率が上がり、分かりやすいと感じることが示された。分かりやすさの要因としては、日本語の音声のリズムに対する意識を生徒がある程度もっているということと音声を聞きながら文を最後まで読み切る、何度も読むことができたということが考えられた。また、イラストに語順が示され、利益を受けるものと動作主が視覚的に分かりやすいアニメーション教材は、特に受動態の学習において効果を示した。デジタルコンテンツとしたことで生徒が取り組みやすく、分かりやすいと感じていることも示された。使役態の学習では、動詞によって変化する動作主のヲ格・ニ格をアニメーション教材だけでは説明しきれないという課題が残った。今後は構文ごとの課題について検討し、音声とアニメーションを合わせた教材の開発をめざしたい。

V. 文献

坂口嘉菜・澤隆史(2016)聴覚障害児の格助詞の理解に関する一研究②—受動態・使役態・授受表現における格助詞の誤用の特徴及び教材の活用—。日本特殊教育学会第54回大会発表論文集, 新潟, P7-32 (謝辞)

教材の作成にあたり、東京学芸大学澤研究室の学生の皆様にご協力いただきました。記して感謝の意を表します。※本研究はJSPS 科研費 16H00265 の助成を受けたものです。(SAKAGUCHI Kana, SAWA Takashi)